

# フィリピン教育制度改革期における次世代博物館研究

寺田 鮎 美

東京大学総合研究博物館 特任助教

## 緒 言

教育は博物館の基本機能の一つであり、20世紀後半以降、博物館研究の中で博物館教育の専門性が確立するにつれ、ますます重視される傾向にある<sup>1)</sup>。1901年に設立されたフィリピン最大の博物館組織であるフィリピン国立博物館が現行体制の根拠法に掲げる目的にも、研究機関や文化拠点と並び、教育機関としての役割が第一番目となっている(「1998年国立博物館法」第6条<sup>2)</sup>)。

現在フィリピンでは、基礎教育制度改革が進行中である。2010年発足のベニグノ・アキノ政権は国際水準より短い基礎教育期間(初等教育6年と中等教育4年)を拡大するため、「K to 12」という新制度の導入を決定した。「K to 12」とは、幼稚園と基礎教育12年(初等教育6年、前期中等教育4年と後期中等教育2年)からなる。新制度は2011年度から段階的に実施され、17年度には完全導入予定である。

この教育制度改革期を背景に、博物館教育が今後いかにあるべきか、規模および存在意義の大きさの点で国内に類を見ないフィリピン国立博物館を事例研究として検討することは、重要性和緊急性の両面において社会的効果の高い次世代博物館研究となると考えられた。

## 方 法

本研究では、フィリピン国立博物館の博物館教育の現状と特徴を明らかにするための基礎調査を行った。本稿では、1) ミュージアムガイドの活動、2) 学生の来館実態に関する現地調査について報告する。

1) ミュージアムガイドの活動に関する調査では、「博物館教育(Museum education)」部門に設けられた専門職ミュージアムガイドにインタビュー調査を実施した。2014年8月13~14日に調査協力を得たミュージアムガイドは、ガイド歴約20年のキャロル・マグダレーノ氏および同約30年のローズ・アルピオ氏の2名である。

2) 学生の来館実態に関する調査では、マニラの国立博物館群のうち、国立フィリピン人博物館(National

Museum of the Filipino People)にて、中等教育(高校)以上の学生を対象とした来館者アンケート調査を実施した。調査時期は学期末の長期休暇(4月から5月)を避け、調査対象とする学生の来館ピーク期とし、2014年7月24日~8月24日までの16日間で322サンプルを回収した。

## 結 果

### 1. ミュージアムガイドの活動内容

2014年8月13日現在、ミュージアムガイド数は5名であり、フィリピン人博物館に2名が配置されるほか、隣の建物である国立美術館(National Art Gallery)に3名が割り当てられている。約半年から1年を目途に定期的に両館間で配置転換がなされており、ミュージアムガイドに性格の異なる二館での勤務経験を可能にし、様々な展示物に関する知識を身につけ、深めるためのスキルアップの工夫となっている。

学校団体利用は大学、高校、小学校に分けられるが、一番多いのは大学である。マニラ近郊だけではなく、地方の学生もギャラリーツアーに参加している。

2013年のツアー予約件数は図1の通りである。最多の1月は135件を数える。件数は例年、月別に異なるが、繁忙期は8月から翌年の3月、閑散期は4月から7月である。フィリピンの学校暦では新学期開始が6月のため、これに合わせて学校団体見学の増減がある。

利用人数の設定は特にないが、人数が多い場合にはグループに分けて対応を行う。ただし、1グループの人数が多くなるとガイドの声が全員に届かないことが問題となり、参加学生の私語が増え、ツアー実施に支障をきたす場合がある。そのため、適正利用人数は1グループあたり1クラス分相当の約40~50人である。滞在時間は、フィリピン人博物館に1時間、美術館に1時間の計2時間が一般的である。それより時間が短いこともあり、利用団体側でどちらかの館のみの見学を選ぶことも可能である。

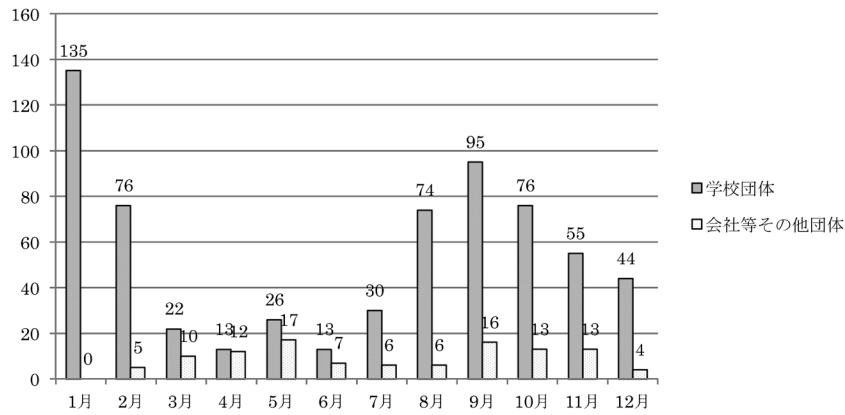


図1 2013年12月別ギャラリーツアー予約件数 (出典：フィリピン国立博物館提供データより筆者作成)

表1 来館目的と来館パターンのクロス表

来館目的	来館目的に選んだ場合「はい」、選ばなかった場合「いいえ」	来館パターン								計
		スクールトリップ		家族と		友人と		一人で		
		度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	
余暇・娯楽	はい	9	11.7%	3	27.3%	77	36.7%	2	16.7%	91
	いいえ	68	88.3%	8	72.7%	133	63.3%	10	83.3%	219
	計	77	100%	11	100%	210	100%	12	100%	310
学校活動	はい	72	93.5%	7	63.6%	151	71.9%	8	66.7%	238
	いいえ	5	6.5%	4	36.4%	59	28.1%	4	33.3%	72
	計	77	100%	11	100%	210	100%	12	100%	310
フィリピンについて学ぶため	はい	17	22.1%	1	9.1%	66	31.4%	3	25.0%	87
	いいえ	60	77.9%	10	90.9%	144	68.6%	9	75.0%	223
	計	77	100%	11	100%	210	100%	12	100%	310
博物館に何があるかを知るため	はい	11	14.3%	1	9.1%	65	31.0%	5	41.7%	82
	いいえ	66	85.7%	10	90.9%	145	69.0%	7	58.3%	228
	計	77	100%	14	100%	210	100%	12	100%	310
その他	はい	0	0%	0	0%	6	2.9%	2	16.7%	8
	いいえ	77	100%	11	100%	204	97.1%	10	83.3%	302
	計	77	100%	11	100%	210	100%	12	100%	310

ツアーで各ガイドが話す内容は、展示室内の解説パネル等で勉強し、自分でスクリプトの作成を行っている。案内する展示物は、学校団体の場合、基本的には学校教員の要望を事前に聞き、それに依拠して選択を行う。ガイド方法の基本方針として、双方向性を重視している。

使用言語は参加団体の要請に応じて、英語もしくはフィリピン語での対応を行う。おおよその割合としては、英語が6割、フィリピン語が4割程度であり、大学生の場合は英語を使用することが多い。

## 2. 学生の来館実態

322名の回答者の年齢は13歳から34歳までに分布し、調査対象とした高校生以上の年齢であることが確認でき

た。ただし、高校生のサンプル数が12と極端に少なかったため、大学生310サンプルについて回答者属性、来館パターンおよび来館目的に関する質問項目の集計・分析を行った結果について述べる。

回答者の性別は、男性44.2% (137人)、女性55.8% (173人) となり、フィリピン国内大学進学者の全体割合とほぼ同じであった (高等教育局2009~2010年データ)<sup>3)</sup>。学年は、学部生である大学1~4年の合計が98.1%を占めた。居住地は、地方行政区画で区分した場合には、マニラ市を含むマニラ首都圏が310人中261人となり、84.2%を占めた。博物館が位置するマニラ市内とそれ以外で区分した場合は、マニラ市内が55.5% (172人)、それ以外が44.5% (138人) となり、マニラ市内が半数以上となった。このように、回答者属性の結果よ

り、フィリピン人博物館は学部学生の利用が多く、学生の来館には博物館との距離の近さが要因の一つとなっている可能性が推定された。

誰と来館したかを尋ねた来館パターンに関する単数選択式設問では、「友人と（スクールトリップ以外）」が67.7%（210人）と最も多かった。「スクールトリップ」が24.8%（77人）とそれに続き、二つのカテゴリーを合わせ、9割以上を占めた。「家族と」は3.5%（11人）、「一人で」は3.9%（12人）となった。複数選択式設問とした来館目的では、「学校活動」が238人と最も多かった。他の選択肢は、「余暇・娯楽」91人、「フィリピンについて学ぶため」87人、「博物館に何があるかを知るため」82人、「その他」8人となった。以上の単純集計結果より、回答者の大学生はスクールトリップに限らず、友人を伴った個人見学の来館パターンでも、学校活動を目的に来館する場合が多いという傾向が読み取れた。

続いて、来館目的の各選択肢を選んだ場合を「はい」、選ばなかった場合を「いいえ」として、来館パターンとのクロス集計を行った（表1）。その結果、カイ二乗検定により、1%以下の有意確率で「余暇・娯楽」（ $\chi^2=17.957$ ,  $df=3$ ,  $p<.000$ ）および「学校活動」（ $\chi^2=16.634$ ,  $df=3$ ,  $p<.001$ ）に、また5%以下の有意確率で「博物館に何があるかを知るため」（ $\chi^2=11.177$ ,  $df=3$ ,  $p<.011$ ）に統計的に有意な値が示された。

この結果から推定されるのは以下の3点である。まず、「余暇・娯楽」を来館目的に選んだ回答者は「友人と」が36.7%と他の来館パターンより大きな割合を示し、単純集計で2番目に大きなカテゴリーであったスクールトリップに比べ、最大カテゴリーである友人との来館パターンでは楽しみを求めて来館する傾向が見られた。次に、「学校活動」を目的とした場合は「スクールトリップ」による来館が93.5%と他の来館パターンに比べ割合が高く、学校活動としての団体訪問が多いという整合性のある傾向が見て取れた。ただし、度数では学校活動を目的に「友人と」訪れる来館パターンが151人と最も多く、授業の課題等でスクールトリップとは別に、友人とともに来館する学生が多数いることもわかった。また、「博物館に何があるかを知るため」を目的とした場合は「一人で」の来館が41.7%、「友人と」が31.0%と他の来館パターンに比べ割合が高かった。これは、来館動機が受動的になりがちなスクールトリップや両親に伴われての来館に比べ、これらの来館パターンは学生自身が自ら何かを見て学ぼうという意欲が高いのではない

かと考えられた。

## 考 察

以上より、1) ミュージアムガイドの活動の主な特徴としては、大学生の学校団体対応を中心としている点、ギャラリーツアーの構成は学校側の要望を反映しつつ、専門職としてガイド個人の裁量に任されている点、ガイド方法の基本方針として双方向性が重視されている点が明らかになった。この特徴から指摘できる課題は、大学生を対象とした双方向性を備えた質の高いガイドを提供するための技術向上である。現状では、専門職としてのガイドが配置されている点で一定程度の質は保障されていると言えるが、非定期的な研修の機会はあるものの定期的な研修は行われていないとのことであり、今後の発展のためにはその機会の増加が必要であると考えられる。

2) フィリピン人博物館への大学生の来館実態の主な特徴として、来館パターンと来館目的については、スクールトリップに限らず、友人を伴った個人見学の来館パターンでも学校活動を目的にする来館が多いことがわかり、余暇・娯楽目的と友人との来館パターンおよび学校活動目的とスクールトリップ目的の来館パターンに影響関係が認められた。このような現状から、現在の展示が特に学校活動との関連で有効に利用されており、今後の博物館教育の充実のためには常設展示リニューアルや特別展示企画の際に、大学の授業との関連性を考慮に入れた展示内容を組み込む等の具体的な対応策が考えられる。

なお、教育的役割の側面から次世代博物館研究を進めるためには、博物館教育の地域の特徴や課題を明らかにし、地域間格差の問題も考慮に入れる必要がある。今回の現地調査はマニラの国立博物館群のみで行ったが、国立博物館が管轄する地方分館を事例として取り上げ、マニラ以外の地方の博物館教育の現状把握を行うことも今後の重要な研究課題となる。

## 謝 辞

本研究の遂行にあたり、平成26年度学術研究奨励金のご支援を賜りました公益財団法人三島海雲記念財団に厚く御礼申し上げます。また、現地調査にご協力いただきましたフィリピン国立博物館スタッフの皆様にも心より感謝申し上げます。

文 献

- 1) G. Hein, G.: "Museum Education," (S. Macdonald, ed.) *A Companion to Museum Studies*, pp. 340–352, UK: Blackwell Publishing, 2011.
- 2) 「共和国法第8492号 国立博物館を設立し、その占有施設及びその他の存在目的を提供する法律 (*Republic Act No. 8492 AN ACT ESTABLISHING A NATIONAL MUSEUM, PROVIDING FOR ITS PERMANENT HOME AND FOR OTHER PURPOSES*)」条文全文はフィリピン国立博物館HP「National Museum Act of 1998」(<http://www.nationalmuseum.gov.ph/nationalmuseumbeta/Relevant%20Laws%20and%20Issuances.html>, 2015.06.18最終確認)を参照。
- 3) Higher Education Enrollment and Graduates by Sector, Discipline Group, Sex and Academic Year: AY 2004/05-AY 2009/10. フィリピン高等教育局HP「CHED Statistics」(<http://www.ched.gov.ph/index.php/home/media/data/statistic/ched-statistics/>, 2015.03.01最終確認)よりダウンロード。